

価値形態論と貨幣の謎

価値形態論は『資本論』刊行以来、世界的に激論の交わされてきたテーマです。現在に至るもまだ見解の統一が見られていません。それはマルクスの価値形態論自身が未解決の問題を残しているからであると、私は考えています。この論文では、マルクスが貨幣の謎をといたと自信をもって宣言している価値形態論の問題点を、単純な価値形態論から再検討してゆきます。

マルクスは一般的価値形態論から貨幣形態への発展を「社会的慣習による」と説明していますが、これではその発展の論理を説明したことになりません。マルクスがそう考えたのは、一般的価値形態で、どの商品でも一般的等価になれるとしたからです。貨幣形態を一般的価値形態へ還元する（抽象する）ことは、確かに貨幣の神秘性を解くこととなります。しかしそれだけでは、なぜ一般的価値形態が貨幣形態へと発展しなければならないか、を説明したことにはなりません。

この問題を解くためには、単純、拡大、一般の価値形態を再検討するだけでなく、商品論の論理構造を再検討する必要がある、と考えています。その際は、これまで注目されることがほとんどなかった、マルクスの商品世界という概念が重要である、と考えています。この語は『経済学批判』では使われていませんでしたが、価値形態という語が初めて論じられることになった『資本論』では、多用されることになりました。この語を基軸にすると、商品論は次のように再構成しうることになる。

- 1、 商品の2要素一価値と使用価値
2. 価値形態論
 - a 単純な価値形態
 - b 拡大した価値形態
 - c 一般的価値形態
3. 貨幣形態

この場合、貨幣形態はたんなる価値形態の第四の形態というのではなく、それを基礎にしながら、第1節と第2節を統一する位置に立つことになる。第1節では、すべての商品が参加する商品世界のなかで、同質で量的にしか相違しないものとして価値がきていされ、質的な相違として使用価値が規定される。

しかしこの商品世界は、抽象としてのみ存在し、実在できない。第2節価値形態論は、二つの商品が相対的価値形態と等価形態において関係することによって、それぞれの商品が価値をもった商品として実在しうることを示す。しかし一般的価値形態論に発展しても、一般的等価商品を統一できず、商品世界を構成することができない。この一般的価値形態の限界を克服し、統一した一般的等価商品が貨幣に他ならない。この貨幣金を一般的等価としてすべての商品（金を除く）がそれで価値表現する（価格表示）とき、初めて商品世界が現実化

することになる。現実の価値表現が価格表示でしかないのはこのためである。

このように一般的価値形態と貨幣形態を関連づけるとき、初めて一般的価値形態論から貨幣形態への発展の必然性の論理が解明でき、貨幣の謎の解明がなされたといえるのではないか。